

---

《第3回》

日 本 文 化 塾

(芸術と鑑賞)

平成21年度 特別公開講座

解 説

テーマ:

「舞う、謡う、語る... 精選上方芸能シリーズ」



大阪樟蔭女子大学

---

## 春期 4月～6月〔上方文化の舞と謡い〕

## ■講演

小阪キャンパス：4月18日(土)13:00～14:30

演題：「粋の美意識はなぜ衰弱したのか」

講師：木津川計／雑誌「上方芸能」発行人、和歌山大学客員教授、日本文化塾顧問

粋という字の読み方が東京と大阪で違ったのです。東京は「いき」、大阪は「すい」と申しました。共によく似た美意識ですが、こんな違いがあったのです。「いき」は渋味に苦味加わりますが、「すい」は渋味に甘味加わります。苦味は武士主体の江戸、甘味は町人主体の大阪なればこそ、当然生まれた相違です。

ですが、大阪の「すい」は「明治以降、時間とともに「いき」に圧倒されつつあり」(上方語源辞典、前田勇編)でしたから、早くに息も絶え絶えになり、「いき」だけが永らえたものの、いまでは日常語としてほとんど使われなくなったのです。しかし伝統芸能、とりわけ歌舞伎の世界には「いき」の身体表現や美意識が色濃く残っています。

色合いや建築様様だったのでしょ。それらを語るには、戦前の京大哲学部の教授・九鬼周造の名著「いきの構造」に依らねばなりません。

九鬼は媚態と意気地と諦めを「いき」の三徴表としました。それらの上に立って、次のような身体表現、即ち、言葉づかい、姿勢を軽く崩す、薄物を身にまとう、洗い髪他が「いき」な身体表現とみなしたのです。

九鬼は「いき」の美意識、その解明のほとんどを花柳界の女性の在り様から導き出したのです。一般の女性を観察しなかったものだから、特殊な見方に局限されたのは「いきの構造」の弱点でした。

しかし、「いき」論を確立する上で、九鬼の試みはたいへん貴重で、「いき」の美意識の生まれた文化文政期以降の日本人論の原形を理解することが九鬼の労作によって可能になったのです。

ではなぜ「いき」の美意識も言葉も衰弱したのでしょうか。それは講話の中でお話しすることにしましょう。

## ■長唄と舞踊

小阪キャンパス：5月16日(土)13:00～14:30

演目：「島の千歳(しまのせんざい)」、長唄の代表的旋律をメドレーで披露

解説：村屋寛次郎／社)長唄協会関西支部事務局長

実演：村屋寛次郎・村屋浩基・村屋宣三(三味線)、芳村伊四太郎(唄)、望月太八一郎・

中村寿慶・藤舎悦芳・藤舎華生(鳴物)、藤間勘祐祐(舞踊)

【長唄と日本舞踊】

長唄は、歌舞伎舞踊の発達に大きく貢献しています。元禄の女名形芳沢あやめは「所作事(舞踊)は狂言の花なり、地は狂言の実なり」という言葉を残しています。

初期の歌舞伎から舞踊は大きな魅力であったようです。その大きな要素の1つに音楽がある事は言うまでもありません。役者の演技を生かすも殺すも音しい、そこで果たす音の役割はさらに重要です。歴史的に見ても、長唄と歌舞伎の関わりは古く、長唄は歌舞伎を母胎として発生発達を遂げた音楽といえます。歌舞伎が未だ演劇本来の形を整える以前、若衆歌舞伎時代からの繋がりで、その頃の長唄は、上方唄の内の長歌と呼ばれたもので、事実上の長唄の完成は享保年間の事で、初代瀬川菊之丞、初代中村富十郎など、上方から下ってきた女形の演じる所作事が江戸の人気を集めますが、その全ては長唄でした。「京鹿子娘道成寺」「傾城無間の鐘」「鶯娘」等、多くの名曲を残した享保から宝暦にかけての所作事は、女形の領域と決まっていたから、長唄も女性的で優艶な趣の作品が多かったのですが、天明期に至って、初代中村仲蔵などの役も舞踊を演じるようになると、長唄の曲風も多彩になり、やがて文化・文政期の変化舞踊の全盛期を迎え、内容はさらに多様化し、音楽的にも完成の度をたかめました。幕末から明治にかけては、歌舞伎そのものの高尚指向を反映し、「勧進帳」「連獅子」など、能や狂言の歌舞伎化が活発になり、長唄の守備範囲は広がり、舞踊音楽としてその首位を占めるに至りました。

長唄の魅力は、出陣子の華やかさと、鳴物との連携による明快なリズム感にあります。

演者もクドキなど感情表現を演じる箇所以外は、リズムに身をゆだね、踊り本来の躍動美を第一に心がけて演じます。

今回の講演では、年代をおってその代表曲を聴きながら解説をし、次に、四季の長唄を鳴物の効果と共に、舞踊の表現との関係を解説します。そして、長唄の代表的な旋律を、三味線と鳴物でメドレーで聴いて頂き、最後に舞踊「島の千歳」をご覧頂きます。

## ■上方舞

小阪キャンパス：5月23日(土)13:00～14:30

演目：「浦島(うらしま)」山村若、「ゆき」山村光

解説：森西真弓／雑誌「上方芸能」編集代表、大阪樟蔭女子大学教授

実演：山村若／舞踊家・山村流宗家、山村光／舞踊家・山村流

【上方舞と山村流】

山村流は上方舞を代表する流儀で、元上方の歌舞伎役者だった初代山村友五郎(後に舞扇斎吾斗)によって、文化三年(1806)に創設されました。初代家元は当時、上方歌舞伎界の大立者だった三代目村歌右衛門と幼馴染で、歌右衛門に才能を認められ、専門の振付師となりました。

山村若先生はその六世宗家で、舞い手としてはもちろん、歌舞伎や宝塚歌劇などの振付、演出でも活躍されています。古典を大切にしながら新作も手がけ、男性家元として初代友五郎以来の歌舞伎舞踊の傳承にも熱心に取り組んでおられます。今回は長唄「浦島」を披露してください。「浦島」は三代目歌右衛門が得意とし、山村流の特徴である二枚扇の手が取り入れられた変化のある演目です。山村光先生は家元のご令妹で、樟蔭中学・高校のご出身。女性らしいはんなりとした美しい舞姿に定評があります。兄君を支えてともに流儀の発展に尽されています。今回は艶物の代表作である地唄「ゆき」を舞ってくださいます。地唄舞はかつて能楽を習うことが許されなかった女性の為に能楽の「仕舞」の型を取り入れて友五郎が上方の土地の歌＝地歌(地唄)に振り付けられたのが始まりです。

能から取られた上品な舞として、大阪の商家の子女にとって山村流を修得し名取を取得することが「嫁入り道具」と呼ばれるほど隆盛を極め、山村流は地唄舞の流儀と認識されるまでになりました。「ゆき」は地唄の代表曲であり、地唄や地唄舞を愛した谷崎潤一郎の「細雪」において四女・妙子が「ゆき」を舞う姿が描かれています。

今回は、山村流の源流ともいえる歌舞伎舞踊の代表演目である長唄「浦島」と山村流の本流と認識されている地唄舞の代表演目であり山村流の魂とも称される地唄「ゆき」、大阪で生まれ育った山村流の二つの流れを皆様にご覧いただけます。

## ■女流義太夫

小阪キャンパス：5月30日(土)13:00～14:30

演目：「壺坂観音霊験記(つぼさかかんのんれいげんき)」

解説：森西真弓

実演：竹本友香／女流義太夫演奏家、豊澤雛文・豊澤源幸／同(三味線)

【女流義太夫の魅力】

女流義太夫はかつて「娘義太夫」と呼ばれ、明治時代には今のアイドルタレント並の人気を誇るスター芸能人でした。竹本綾之助、豊竹呂昇など、今に名を残す名人も現れています。当時の青年たちの熱い支持を得、彼らが浄瑠璃の聴かせどころになると客席から「どうする、どうする」と声を掛けたところから、ファンのグループは「どうする連」と称されました。その勢いは、学業に支障があると学校が劇場への出入りを禁止するほどに高まったのです。

起りは近世江戸時代に遡ります。本来、初代竹本義太夫によって完成された義太夫節は男の語り物で、人形浄瑠璃(現在の文楽)の舞台で演奏されました。水野悠子さんの最近の研究によりますと、それを女性が行うようになったのは宝暦年間(1751～64)のことですが、当時はまだお稽古事として嗜む程度で、職業としての「娘義太夫」が登場するのは、次の明和年間(1764～72)になってからのことでした。彼女たちはお座敷や寄席へ出演して人気を博しましたが、その頃、江戸幕府はブローの女性芸能家を認めていません。寛永6年(1629)、女歌舞伎とともに女太夫、女舞も禁止されていたからです。非合法の「娘義太夫」にも文化2年(1805)以降、たびたび禁止令が出されています。ただし、何度も禁令が出されているということは、法の目をかいくぐって繰り返し「娘義太夫」が舞台上に上がっていたことの証左でもあります。

明治になって女性芸能が解禁され、たちまちにして「娘義太夫」が表舞台に躍り出たのは当然の成り行きでした。川上貞奴や松井須磨子など女優ブームに先んじて、人気を獲得したのです。

今回は上方で中堅の女流義太夫演奏家として活躍中の竹本友香先生と、豊澤雛文先生、豊澤源幸先生に、「壺坂観音霊験記」を演奏していただきます。

## ■能

小阪キャンパス：6月6日(土)13:00~14:30

演目：「羽衣(はごろも)」

解説・実演：山本章弘／能楽観世流シテ方準職分、財)山本能楽会理事長

【「羽衣」(ダイジェスト)】

能は室町時代に観阿弥、世阿弥親子によって大成された約650年の歴史を持つ、世界で一番古い仮面劇です。第1回ユネスコ世界無形遺産にも登録されました。後世にうまれた文楽、歌舞伎をはじめとするあらゆる日本の芸能に影響を与えた、いわば日本文化の源流ともいえます。能では「謡」とよばれる語りとコーラス、「舞」、「囃子(楽器演奏)」が一体となって1つの世界を作り出します。簡素化された舞台、無駄をそぎ落とした象徴的な演技、幻想性が強い現代にも通じる普遍的なストーリーなど、芸術的に高い完成度を持っており、また、能面や能装束の美しさも見る人を惹き付けます。人が生き、愛し、憎み、悲しんだり狂ったり、その全てを集約したいわば人間の本質に迫る内容であり、それゆえ長い年月人々に愛されてきたともいえます。

皆さんに本日までご覧頂く「羽衣」は、能のなかでも広く知られている曲です。一般的な「羽衣伝説」では、漁夫が羽衣を返さないで、天女はやむをえず男の妻となり、子供もできた後、隙をねらって羽衣を取り返し、昇天する事になっています。ところが能では、漁夫が天女を哀れんで、すぐに自ら羽衣を返します。羽衣がなくては舞が舞えないと言う天女に、漁師は羽衣を返すと、そのまま舞を舞わないで天に逃げってしまうのではないかとありますが、それに対し天女が「いや疑いは人間にあり、天に偽りなきものを」と答え、漁師も素直に「あら恥ずかしや」と羽衣をすぐに返します。このやりとりも、ひたすら清らかな世界を求める芸術として「羽衣」という能を、各地の伝説より格調高いものになっています。

能は一人お一人の「想像力」に働きかける芸術です。陽春のうららかな浜辺で、天女が舞う美しい清らかな舞いを、天上の世界をお楽しみ下さい。

## 秋期 10月~11月〔上方文化の語り〕

## ■講演

小阪キャンパス：10月10日(土)13:00~14:30

演題：「日本の話芸・語り芸」

講師：関山和夫

「話芸」とは、落語や講談のような、長い歴史と伝統の中で培われ、鍛えられ、練りあげられた「はなし」の芸をさす。「話芸」という呼称が有識者によって用いられるのは、昭和28年(1953)ごろであり、拙著『説教と話芸』(昭和39年2月・青蛙房)が本のタイトルに「話芸」が用いられた最初であり、「広辞苑」も第三版より「わげい」が入れられた。

一般にこの「話芸」という語が普及したのは昭和40年代に入ってからである。中世末期に端を発し、近世初頭に原形を整えて今日に及び講釈(講談)や落とし噺(落語)の伝統的なものを総括して「話芸」と呼ぶのは、日本の「はなしの芸」を言い得てわかりやすく、私は最適の用語と考えている。

話芸は、長い歴史の中で幾度も口演されて「芸」としての型を創造した。「話術」とはおのずから趣を異にする。如何に雄弁で話術に巧みでも、それは話芸ではない。人間の社会生活に密着し、笑わせたり、感動させたりしながら、しみじみと聴かせる技術を「芸」というのである。同じ一つの「はなし」を聴かせるのにも、さまざまな演出をこらし、創意と工夫を加えて何度も何度も演じて「型」を作ることから始め、それから芸を創造していくところに日本の話芸の特色があった。

「はなし」「語り」についての語源を説明し、その芸としての発展過程を具体性をもって述べることは、日本の話芸・語り芸を理解する上で極めて重要である。節談説教、平家琵琶、祭文語りから浪花節への系譜、説経浄瑠璃、講談、落語(人情断を含む)の本質を熟慮し、日本の庶民文化史の底辺に深く根を張って進展し、現代に及び伝統文化の特質を、日本の話芸・語り芸から追求し、もって隠れた日本文化史の一面を正当に摘出・評価しようと意図するものである。話芸は聴衆の感動を呼ぶものではない。

## ■語り芝居

小阪キャンパス：10月17日(土)13:00~14:30

演目：「大経師昔暦(だいきょうじむかしごよみ)」

解説：木津川計

実演：南条好輝／俳優、三島ゆり子／俳優

【大経師昔暦】

文楽、歌舞伎の作者として世界的に有名な近松門左衛門の作品を「語り芝居」の形式で演じていただけます。「語り芝居」とは、単に物語を朗読するのではなく、語り手が作品の登場人物を生きた人間として演じるもので、俳優ならではの描写力で近松の世界をリアルに表現するところに特色があります。それは、あたかもラジオドラマのように、聴いているのに、まるで芝居を観ているような感覚で聴衆の耳に届きます。

南条好輝先生と三島ゆり子先生は、俳優として活躍される傍ら、2004年からトリイホールと提携し、園田学園女子大学近松研究所・研究員の水田かや乃教授による監修の許、近松門左衛門の世話物(町人を主人公とした江戸時代の現代劇)を現代語で語る「近松二十四番勝負」の活動を続けてこられました。台詞を中心に、作品の全編を分かりやすい言葉(地の文は共通語、台詞は現代の大阪言葉)で味わっていただけるよう工夫された脚本は南条先生が書かれ、水田先生の監修を得て練り上げられています。そして、地の語りと男の登場人物を南条先生が、女の登場人物を三島先生が受け持ち、繊細な息遣いと微妙な台詞表現にこだわって描き出されていきます。また、関西舞台美術家の重鎮である竹内志朗先生が美術を担当され、音響、照明の効果もあいまって、近松作品を現代人に身近に感じていただける構成となっています。

今回は近松の世話物の中から姦通物のひとつ「大経師昔暦」を上演していただきます。この作品は京都の大経師(朝廷御用の表装師)の女房おさんが、暗闇の中、誤って手代の茂兵衛と不義密通の罪を犯したことから、周囲の人びとを巻き込んで展開される悲劇が描かれています。おさんの年老いた両親の嘆き、下女おたまと伯父・赤松梅龍の心遣いと犠牲など、二人をめぐる善意の登場人物たちの悲嘆や苦悩は、時代を超えて聴く人の胸に深く響くことでしょ。

## ■講談

小阪キャンパス：10月31日(土)13:00~14:30

演目：「河内若江の戦い(木村重成の最期)」「難波戦記」より

解説：木津川計

実演：旭堂南海／講談師

「講談」と言いますのは主として歴史物語を「見てきたように」口一つで物語る大衆芸能です。昔は「講釈」と言いました。そしてその喋り手は今「講談師」、昔は「講釈師」と呼びました。

おおよそのスタイルは高座に座布団と、落語のそれと同じですが、前に「釈台」と呼ばれる台を置き、それを「張り扇」でパンパンと叩きながら物語ります。

講談のお喋りの特徴は、まず「七五調」を基本とし、「節」が付いたような抑揚豊かなリズムで読み込んでいく「修羅場」と呼ばれる口調が入る所でしょう。殊に、戦記物にはそれが顕著です。

さて、今回、口演させて貰いますのは、その戦記物です。でも、東京(江戸)のそれとは違い、物腰柔らかく、馴染みやすいと信じております。また、『難波戦記』という大坂冬・夏の陣を描いた物語は、徹底して徳川家康をコキおろし、大坂方を英雄に扱っております。阪神タイガースを鼻負する大阪人の心意気はこの時分から既にあったと言えるかも知れません…。

演題の「河内若江の戦い」でもお解りのように、ごく身近な場所が舞台となりました物語です。実際、木村重成のお墓も残っております。もし、この講談をお聴きくださり、お墓や、合戦が行われた場所などへ足をお運び下されば、これほど幸運な事はありません。

## ■浪曲

小阪キャンパス：11月14日(土) 13:00～14:30

演目：「あ～吉岡先生」菊地まどか、「番町皿屋敷～お菊と播磨」春野恵子

解説：木津川計

実演：菊地まどか／浪曲師、虹友美/同(三味線)、  
春野恵子／浪曲師、沢村さくら/同(三味線)

### 【浪曲の新展開】

浪曲は説経節の流れを汲んだ音楽芸能で、物語を言葉と声と節(メロディー)、三つの相乗効果で表現していきます。伝説によると浪花伊助が浪曲の開祖と言われ、文化文政年間に大阪で「浮かれ節」の幟を立てて興行し、人気を博しました。関西の「浮かれ節」が関東に伝わって「浪花節」の呼称が生まれ、大正時代に統一名称として「浪曲」が使われるようになります。

浪曲を一躍、国民的芸能に育てあげたのが明治後期に登場した桃中軒雲右衛門でした。雲右衛門はそれまでの様式を一新、肩まで垂らした総髪に、紋付の羽織袴を身につけ、クロスを掛けたテーブルを前に立ったまま口演する独自のスタイルを確立します。その頃、大阪でも二代目吉田奈良丸(後に大和之丞)が活躍し、大正時代にはレコードの普及もあって、雲右衛門や奈良丸の浪曲は全国津々浦々にまで浸透していきます。当時、盛んに演奏された代表的な演目は「赤穂義士伝」でした。さらに昭和に入るとラジオが生まれ、浪曲は電波に乗って全盛期を迎えます。浪花亭綾太郎の「壺坂霊験記」、寿々木米若の「佐渡情話」、広沢虎造の「次郎長伝」などが民衆に親しまれました。

女流浪曲家も明治期から登場しています。貞女物や孝子伝で女性の特性を生かした吉田小奈良(後に元女)、美声と上品な舞台で一時代を築いた初代春野百合子などが知られています。

戦後は娯楽の多様化もあり、衰退を余儀なくされましたが、初代京山幸枝若、二代目春野百合子、真山一郎、富士月の栄が関西の浪曲を守り続けました。平成に入ってからには新人も増え、ベテランから若手まで幅広い層の演者が活動を繰り広げています。

中でも、今回ご出演の菊地まどか先生と春野恵子先生は女性若手浪曲師として注目を集める存在で、新しいスターの誕生と期待されています。曲師は虹友美先生、沢村さくら先生です。

## ■筑前琵琶

小阪キャンパス：11月21日(土) 13:00～14:30

演目：「敦盛(あつもり)」、「壇の浦(だんのうら)」

解説：森西真弓

実演：奥村旭翠／筑前琵琶演奏家、日本橋会大師範

### 【勇壮と華麗—筑前琵琶の世界】

#### ●琵琶楽の歴史

琵琶は歴史の古い楽器です。4弦または5弦の弦楽器で、西域から中国を経て、奈良時代に日本へ移入されました。古代から雅楽の楽器としても用いられていますが、単独で「琵琶楽」として演奏された最初は鎌倉時代初期に成立した「平曲」でした。『徒然草』によると、雅楽の名人・信濃前司行長が作り、僧・生仏に語らせたのが始まりと伝えられています。「平曲」は「平家物語」を琵琶の演奏に合わせて語る芸能で、「平家琵琶」とも称され、盲人の僧侶が行うところから「盲僧琵琶」「琵琶法師」の名称も起りました。小泉八雲『怪談』でお馴染みの「耳なし芳一」がそうです。また、「源氏物語絵巻」に見られるように、貴族たちも日常的に演奏していました。

初め琵琶法師は天台宗に所属する宗教家でしたが、後に独立して職能団体である「当道座」を組織、「検校」「勾当」「座頭」などの官位を設けるようになります。「平曲」は中世室町時代に全盛期を迎え、多くの流派が生まれました。「平曲」の演奏が「検校」の資格に不可欠であったことから、近世江戸時代には京都や江戸、尾張で伝承されました。

一方、室町末期、薩摩の島津家では武士道鼓舞を目的とした「薩摩琵琶」が生まれて近代へ伝承されました。さらに明治になって橘旭翁により「筑前琵琶」が改良創始され、女流の演奏家を輩出するようになっていきます。本日ご出演の奥村旭翠先生も、その「筑前琵琶」の奏者として活躍されています。今回は導入に「敦盛」と、最後に大曲「壇の浦」を演奏していただきます。